

福井丸

《主要目》鉄製貨物船、右近権左衛門所有、2,943
総トン、主機二連成1基、1882年英國サンダーラン
ド造船所建造、前名アバーゲルディー ABERGELDIE。

広瀬中佐とともに旅順に沈んだ 北前船主のフラッグシップ



福井丸（左上は広瀬中佐）／写真提供＝小林義秀

汽船業に転向した北前船主

北前船（きたまえぶね）というものは、江戸から明治にかけて、日本海の海運業の主力船として活躍した廻船（貨物船）のことである。ハード面では弁才船（べざいせん）、俗にいう千石船の一典型であり、運航面では、買積船であることを特徴とした。つまり、船主が荷主を兼ね、自分の船に商品を積み込んで商売をするわけだ。自船を持つ総合商社のようなものだから、収益も大きかった。

こんにち、石川県加賀市の「北前船の里資料館」や福井県河野村の「北前船主の館・右近家」を訪れると、その盛大な運航活動のさまでしのぶことができる。

牧野隆信氏の「北前船」（一九六四年、柏書房刊）によれば、北前船の全盛期は明治三十年代まで、とある。たいがいの日本の海運史書は、明治にはいつて、政府の海運・造船近代化政策の結果、一足とびに汽船の時代に突入したように記述しているが、実際は、明治期の内航海運は、弁才船や和洋折衷帆船がささえていたのである。

とはいって、明治二十年代になると、日本郵船や大阪商船の誕生に刺激され、汽船時代の到来へ向けて、汽船業へ転向を図ろうとする北前船主も出現した。石川県大聖寺近郊の瀬

越村（現在の加賀市）の広海（ひろうみ）、大家（おおいえ）、福井県河野村の右近（うこん）といった船主たちである。

三家の中でもっとも早く汽船に踏み切ったのは広海家だ。一八八八（明治二十一年）年に同家の当主広海三三郎は、船齢十四年の小型貨物船を外国から購入し、「北陸丸」と名付けて運航した。

次いで一八九一（明治二十四年）年に、大家四代目の当主大家七平が汽船業に転向し、外国購入船「加賀丸」を、北前船航路の神戸（北海道間に投入した。翌年、七平がドイツから入手した「愛国丸」は、二千総トン足らずの船であるが、一八九四（明治二十七年）年に、ハワイの民間契約移民第一陣百五十人を乗せて、ホノルルまで航海している。

大家七平はさらに、日清戦争後、新潟（函館）～元山（ウラジオストク）間、函館～コルサコフ（大泊）間の二航路を開設。日本郵船のボンベイ航路とシアトル航路とともに、国の特定助成航路の指定を受けた。七平が国の助成を得たのは、極めて異例のことだ。汽船業に転向した北前船主は、多くは、公的な援護が得られず、消滅していくのである。

日清、日露の両戦争では、こうした北前船主の汽船が、御用船として活躍した。その中には、日露戦争の旅順港口の閉塞船として、

華々しい最後を遂げた船もある。前述の「愛國丸」（閉塞船当時は大阪商船所属）、広海二三郎の「江戸丸」、そして今回紹介する右近

三郎の「福井丸」がそれである。

権左衛門の「福井丸」がそれである。

右近家のフラッグシップ

『船名録』を繰ると、右近家の「福井丸」は二隻ある。明治三十七年版までに掲載されている「福井丸」は鉄製汽船。三十八年版以降

のは鋼製汽船で、四千百八十九総トン、とある。「福井丸」が旅順で沈んだのは、一九〇四（明治三十七年）年三月のこと。『船名録』は、前年末の時点で編集されているから、くだんの「福井丸」は当然、前者の鉄製汽船ということになるが、市販の史書では、このあたり、混同している例が多い。

もう一度、明治三十七年版の『船名録』を開いて右近権左衛門の所有船を拾うと、「福井丸」「河野浦丸」「勝山丸」「南越丸」の名がある。いずれも、外国から購入した中古船で、最大船は、もと英國船の「福井丸」である。つまり、「福井丸」は、右近家のフラッ

グシップだつたわけで、閉塞作戦で失われたあと、ただちに代替船を充当し、その船名を継がせたのである。

保存されている。日露戦争の戦勝記念にと、ゆかりの者が奉納したのであろう。

旅順港閉塞船として出撃

「福井丸」は第二回目のときに出撃、港口に自沈した。指揮官は、海軍少佐広瀬武夫（のち中佐に進級）である。

旅順港閉塞のことは「佐倉丸」の項でも述べた。港口に味方の商船を沈め、港内のロシア艦隊を封じ込めるのが狙いであつた。敵の厳重な警戒下で行動するわけだから、当然、命がけの仕事である。

筆者が子供のころ歌つた日露戦争唱歌に、こんな歌詞があつた。うろ覚えだが、

「轟く砲音（つづおと）、飛び来る弾丸、荒波洗うデッキの上で、闇をつらぬく中佐の叫び、杉野はいづこ、杉野はいづや」

沈みゆく「福井丸」からボートで脱出しようとする広瀬が、杉野兵曹長をさがす有名なシーンである。広瀬はこの直後、戦死する。

ロシアを愛し、漢詩を得意としたこの明治武人のすがたは、島田謹二氏の名著『ロシヤにおける広瀬武夫』（朝日選書）に、あますところなく描かれている。

（山田　迪生）